

おおたどうかんゆうひろく

#16 太田道灌雄飛録

編者：木村忠貞（きむら・たださだ 生没年未詳）

刊行：文政5年（1822）

📖 解題

■ 内容

太田道灌（1432-1486 幼名は鶴千代、長じて資長。道灌は出家名）は室町時代の武将で、扇谷上杉氏の家宰として数々の合戦で活躍したが、その能力を主君・上杉定正に妬まれ、相模国糟屋館（現・神奈川県伊勢原市）で謀殺された。幼少より学問に秀でて詩歌にも優れた文武両道の武将として、また



[K28. 61/8/1]

江戸城を築城した江戸発展の祖として江戸時代に人気があった。この太田道灌について、それまでに刊行された文書から断片的な記述を集めて、出生から死までの一生を全6冊にまとめたものが本書である。（なお本編では道灌は「持資」と呼ばれている。）

幼少期に彼があまりに賢（さか）しいので父親が「戸障子屏風は、まっすぐなときは立つが曲るときは立たない」と諫めたのに対して「屏風は曲がっているときは立つがまっすぐなときは立たないではないですか」と反論したこと（第1巻）や、民家で雨笠を所望したところ山吹の花の一枝を出されたという逸話（第5巻）、江戸城築城の様子（第3巻）などが、同時代の合戦や謀略のなかでの道灌の活躍とともに、余すところなく採録されている。

■ 作者

作者の木村忠貞は、「木邨梅年」「希言子梅年」という名で『鎌倉武鑑』『足利(家)武鑑』の編集にも関わっているが、生没年等詳細は不明である。

絵師は北尾美丸と勝川春亭。北尾美丸（1792-?）は、文政10年（1827）に「二世重政」を襲名した北尾政美門下の絵師で、合巻の挿絵を多く手掛けた。

勝川春亭（1770-1820）は勝川春英門下の絵師で、合巻・読本・劇書の挿絵を多く描き、洋風の明暗法を使用した風景画も残している。

江戸後期の国学者である六樹園石川雅望（1754-1830）が跋文を書いている。

本文を読む

<版本>

『太田道灌雄飛録』1-6 木村忠貞著編 北尾美丸・勝川春亭画 河内屋太助
ほか 1822 [K28.61/8/1] - [K28.61/8/6]

※表紙に太田道灌の家紋「桔梗紋」の模様が入っている。

『太田道灌雄飛録』1-6 木村忠貞著編 北尾美丸・勝川春亭画 伊丹屋善兵衛 1841 [210.4/20/1] - [210.4/20/6] ※表紙は無地。

<翻刻>

「太田道灌雄飛録」（『岩槻市史 古代・中世史料編2（岩付太田氏関係史料）』岩槻市市史編さん室 1983）[213.4/57/1-2]

<デジタル>

埼玉県立図書館デジタルライブラリー 『太田道灌雄飛録』1-6

<現代語訳>

『太田道灌 別巻一 太田道灌雄飛録 全巻』沢八郎訳 若竹書房 1981
[K97.6/23/6]

参考文献

山本和明「七重八重花は咲けども……『太田道灌雄飛録』にみる物語化の
〈論理〉」（『国文学研究ノート』25号 神戸大学「研究ノート」の会 1991）

※当館未所蔵